

第8回企画・運営委員会議事概要

日 時	平成 25 年 3 月 28 日 (木) 19 時 00 分～21 時 00 分
場 所	保健センター 2 階 研修室
出席者	委 員 徳永幸夫、井上仁、鈴木太、土谷浩也、三谷一恵、篠原繁雄、星川将一、 事務局 市民文化ホール等整備課 河村課長、田辺課長補佐、今村課長補佐、 中山係長、福田係長、佐藤、建設課 篠原課長補佐 空間創造研究所 米森
公開・非公開の別	公開
非公開の理由	

(協議概要)

項 目	協議概要
■会議の成立について	○委員長:企画・運営委員 12 名中7名出席過半数の出席を確認したので委員会は成立。
■会議の公開、非公開について採決	○委員長:本日の議題が「企画運営基本計画(案)について」であり、非公開とする議題ではないので公開。
■第7回企画・運営委員会議事概要について	○事務局:第7回企画・運営委員会議事概要について説明。
■企画・運営基本計画(案)について	<p><プレ事業はどのような事業が考えられるか></p> <p>○空間創造研究所:プレ事業の事例の説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・工所用フェンス(仮囲い)に子どもが描いたポスターを掲示 ・JR の駅にバナー広告などを掲示 ・工事現場説明会 ・地元の子ども対象の見学会等 <p>○委員長:プレ期間中に施設使用料の無償提供を条件に有料イベントも含めてイベントを公募するとホールの PR になるのでは。</p> <p>○委員:市民へ還元するためにも市民にも施設の無償提供ができれば。 愛称募集、工事見学会はどこでも行っているが、子どもポスターの掲示は良いのではないか。</p> <p>現在、秋に文化祭を開いているが、春の文化祭も開いてみては。各地区で開催している文化祭同士の連携も必要。各団体の音楽祭を合同開催しては。</p> <p>○委員長:既存の事業に冠を付けることで、市民の意識付けになるのでは。</p>

ホールの愛称募集についてはどう思うか。

○委員:愛称募集は何らかの形で必要では。

プレ事業案として、市民にブロックを購入してもらい、購入者の名前を刻むことで市民も一緒に建設した証となるのでは。市民文化ホールの住民説明会をプレ事業に位置づけてはどうか。プレ事業を事業としてあまり位置づけず、開館記念事業に注力すべきでは。

○空間創造研究所:愛称募集は全国対象か、市民限定とするのか。

○委員:市民限定だと偏るのではないか。全国募集の方が良い。

○委員:愛称は必要だが、募集方法はよく考えない。

○空間創造研究所:募集は市報で周知したり、インターネットの懸賞サイトを利用すると多くの募集が見込める。また愛称だけでなく、ロゴマークの募集も考えられる。どん帳のデザインも公募する場合もある。例えば四国中央市をイメージしたものなど。著名な方にデザインを頼むと高額になる可能性も。

これまでの意見から愛称募集は方法も含め検討し実施計画に盛り込みたい。

○委員長:何か形になったプレ事業を行うべきか、ホール開館のPRに関したことに留めておく両方の考え方があるが、何らかの形のあるプレ事業を実施した方が良いと思う方は挙手を。

<4人挙手>

○委員:模型の公民館巡回など、市民に今の現状を知らせることを行ってはどうか。

○委員:開館まではより多くの市民に認知してもらうため、ありとあらゆる取り組みをしなければ。可能性を掴むような決め方はいけない。小さなイベントでも良いアイデアなら2ヶ月あれば実施可能なものもある。大プレゼン大会を行い、良い催しには小額の補助を出す方法なども考えられる。間口を狭めないようにしないと。可能性のあることを芽を摘まない方がよい。

○委員長:少しずつ文化の底辺を広げていく、育てていくという意味で開館までの時間をテスト期間として有効に活用し、可能なものを手がけていくという意見だった。

プレ事業については、大きな事業は難しいが、PRや市民への意識啓発につながるもので、可能なものであれば積極的に取り組みれば良いと記述してはどうか。

○委員:プレ事業は実施する、しないの二者選択でなく、可能なものから実施する方向が良い。

工事現場にホールのイメージなどを子どもに描いてもらった絵を掲示する。それを父兄が見にくることも期待できる。やるかやらないかではなく、可能なことはやっていこうという取り組みが良いのではないか。

○委員長:プレ事業は実施可能なものを見つけながら開館に向けての環境、雰囲気づくりとして市民文化ホールを盛り上げていこうという方向性としてほしい。

	<p><開館記念事業について></p> <p>○空間創造研究所:開館記念事業の協議は開館の際の打上花火をどうするかというイメージで考えをいただきたい。</p> <p>開館記念式典はどの施設でも行っているが、柿落とし公演として、三番叟や、楽団を呼んでコンサートなどの例がある。このように単発の花火を打ち上げるだけなのか、ホールの完成を多くの方に知ってもらい、来場してもらう機会として一定期間、芝居や音楽、子ども向けの公演を行うなど開館記念事業として多くの打上花火を上げるのかどうか委員の意見を。また、ただ実施するのではなく、実施の理由についても意見を求めたい</p> <p>○委員長:開館記念式典だけで済ませるところはあるのか。</p> <p>○空間創造研究所:規模の小さなホールを除き、開館記念式典と一定の開館記念事業を行うことが一般的である。</p> <p>○委員長:開館記念式典だけでよいと思われる方は。 (賛成意見なし)</p> <p>それでは開館記念事業は開館記念式典を含め、一定期間行う方針としたい。</p> <p><なぜ開館記念事業が必要なのか></p> <p>○委員:より多くの方にホールを知ってもらい、来てもらうため開館後3ヶ月間はあらゆる人に訪れてもらうために多様な事業展開が必要では。</p> <p>○委員:暮らしの中にホールの存在があり、くつろぐ場所とするため、様々なジャンルの公演を行い、スタッフの経験値を上げることがホールの成功につながるのでは。また芸術性の高いアーティストの公演だと市外から高速での来場が予想され、車の流れなど改善点の検証なども必要では。</p> <p>○委員長:何か具体的な案があるか。</p> <p>○委員:最近は中学、高校の吹奏楽の活動が盛んである。鑑賞型事業として、ふるさとアドバイザーの井川さんを含めてアンサンブルのコンサートが実現すると、音楽に携わる子どもたちに良い影響があるのでは。トップレベルの奏者が当市から出ているということは市の誇りでもあり、自分たちの先輩であることを子どもたちに広めていきたい。また地産地消の芸術文化事業として音楽以外にも当市出身の芸術家に手伝ってもらうのもよいのでは。</p> <p>○委員長:アンサンブルコンサートを行う施設はどうしているのか。</p> <p>○委員:学校へ出向いて行っている。一人でも多くの子どもたちとプロの影響を受けてほしいと思う。このような鑑賞型事業から参加型事業へつながってほしい。</p> <p>○委員長:N響のアンサンブルコンサートを学校の体育館で行うのは音響面などで問題ないのか。</p> <p>○委員:N響のピックアップメンバーは学校の体育館で行う場合もある。この場合、響きがどうこうではなく、生徒とプロが触れ合うことが大切。</p> <p>○委員:今まで市内各地域で行ってきた催しが、新しいホールで行うと違っ</p>
--	--

た形でできると示すことでホールをPRできれば。例えば紙のまち資料館の展示をホールで行うなど。今行っていることがどの様になるかなどを開館記念事業とするのはどうか。肩肘張らないことも良いのでは。

○委員長:ホールが無かったからできなかったこと、完成すれば可能なことはないか。

○委員:前舞台を計画しているので川之江高校や県警のマーチングバンドのドリルなどは可能になるのでは。

○委員長:開館記念事業として新しいホールで同じ催しをしても準備が簡単になったり、演出効果に違いが出てホールのPRになるのでは。またどの程度までがホールで可能になるかというテストの場となるのでは。

○空間創造研究所:これまでの施設で行ってきた事業を新しいホールで行ってみる「ここでやったらこうなった事業」は面白いのでは。例えば大ホール舞台上での書道パフォーマンスとして、舞台上部のカメラの映像を正面スクリーンに映すなど、新しいホールではこのように演出が変わるんだと見せるのも面白い。

○委員長:様々な演出が可能になるのでわくわくするが、ホールの各施設を試す意味でも一定期間の開館記念事業を行うのは有効ではないか。

○委員長:例えば青年会議所の四国大会も市民文化ホールで開催は可能か。

○委員:一年に一度四国大会がある。ホール客席数、分科会スペース等、施設的には可能では。PRになるので各種団体の四国大会を誘致しては。

○委員長:これまでは器が無かったからできないこともあったが、今度は器は用意されている。呼び込むアイデア、意欲さえあればよい。

開館記念事業は、不可能を可能にするための試行錯誤のテストの場としても効果を発揮する。またどこまでのことが可能か、市民の発表、活動の場として各施設をどのように活用できるかを試す場としても有効ではないか。

<開館記念事業を行うための市民組織を立ち上げるべきか>

○空間創造研究所:当面、市が直営する方針だが、開館記念事業の全てを市に任せてよいのか。あるいは市民組織を立ち上げ協力してもらいながら実施していくべきかなど意見を。

○委員:プレ事業に限ってではないが、市民団体で実行委員会をつくり実施する形があったが、この様な形に乗ってくる市民団体はない。当初は直営なのでプレ事業は市単独で行えばよい。実施理由など厳しくなることが予想され、予算的にも思ったことができなくなるのでは。実行委員会やスタッフとしてだけ市民団体を使うのではなく、運営の企画段階から市民が参加している組織でないと難しいと思う。どのようにして組織の中に市民を取り組んで行くのがポイントになるのでは。

○委員長:直営時は市へ任せてはとの意見だが、市の担当部署が行ってい

く中で、これまで協議してきたことが活かせてないとの批判が出ることもあるのでは。

○委員：当然批判が出ると思う。批判が出て指定管理者へ移行しても基本構想の考えから外れることではない。市ができないのであれば指定管理者へ移行すれば良いだけ。これまでのように実行委員会を作るだけではだめだと言っている。運営組織の中に市民が参加していないとだめ。可児の館長は市民が入ると運営が難しいと言っていたが、それは可児市の話で、当市ではできるかどうかはやってみないとわからない。運営組織によって実行部隊が変わってくるのでは。

○委員：市民参画については耳障りの良い言葉、形で終わっていることもある。しっかりとした市民参画を目指していきたいが、そのためには市民に権限を渡す代わりに責任も取ってもらうという覚悟で募集をしなければ。

市民は無償のボランティアに抵抗があるわけではなく、自分のやりがいや居場所を探しており、いくらでも人材はいると思う。プロのコーディネートを市がしっかりとする覚悟がなければできないと思う。それが実現した場合には本当にすばらしい組織、運営の市民参画が実現しているのでは。

○委員：直営時に管理運営の全てを市職員が行うのは無理があるのでは。市民参画の形で市民の協力を得て市の部署と協調しながらという組織づくりが必要ではないか。

○空間創造研究所：実行委員会形式の問題点とは。市民へ渡すある一定の権限とはどのあたりまでの権限か。

○委員：例えば開館記念事業を実施するとして、これまでのようにA事業をX,Y団体で実施するが、実行委員会事務局には市の担当がいるという形が取ればよいが、今後は難しいと思う。市民に労力だけ提供してもらうのは難しいのでは。

○空間創造研究所：全体的な企画ではなく、単発的な企画を市民に担ってもらうということか。

○委員：そうである。開館記念事業に限らず、ホールの今後の運営も含めどのように市民が関われる組織になるかではないか。開館記念事業に限定した組織に市民に参加してもらうのは難しいのでは。

新市合併時に新市誕生祭を実施した。その中でも新市誕生際後も継続したい事業があったが単発で終わり後が続かなかった。開館記念事業も市民を巻き込み実施できると思うが、開館記念事業の1年だけで終わってしまうと思う。開館記念事業後も戻すばみしないよう、将来につなげていけるように最初の段階から継続できる運営組織としないと。

○委員：ホールのハコとしての成長と、人としての組織の成長が共に進んでいくべき。組織が成長していく時は、挫折と成功体験で成長していくが、そのためにしっかりと権限を渡し、責任を取ってもらうことも必要。最後の最後には市に責任を取ってもらうこともあると思うが、このようにすることですばらし

■その他

いホールになるのではないか。

○空間創造研究所:事業の全体企画、継続性を持った組織、市と市民の間に任せる責任と受ける責任が明確になっている組織づくりを望んでいると理解した。

直営、指定管理者に関わらず事業の評価に市民が参加したり、また事業企画に市民が参加するなど、それを単発ではなく継続し、1年後、その先を見据えて計画する中に市民が参加できれば、四国中央市の市民参画、市民協働につながるのではないか。

○委員長:可児市のように専門家集団で運営するのがよいのか、幅広い市民を入れ幅広い意見を聞きながら後に続く組織運営をしていくのがよいのか。

○委員:可児市はプロ集団ではないと思う。プロは館長である。館長をどう選任するかが重要では。館長の下に職員や市民がいるイメージである。責任の取れる、判断できるリーダーがいる組織を作らないと次のステップに進めないのでは。判断、責任の取れる館長が必要。可児市と比較するのは難しいのでは。

○委員長:可児市では赤字出た場合、その補填は館長にもかかってくるのか。

○事務局:単発事業単位での赤字という考え方ではなく、全体事業で考えるのではないか。

○委員長:今は黒字か

○空間創造研究所:当初予算で市から指定管理料として事業費を確保する。事業費は市民の税金を活用するという意味から赤字と受け止められるかもしれない。その事業費で1年間事業を行っていくという意味で、与えられた収支分の予算を超えない範囲で事業を行うという考え方になる。

○事務局:お金で文化や心が豊かになることを図るのは本末転倒になるのでは。

○空間創造研究所:もしかするとお客は入らない事業かもしれないが、その事業を継続していくことで少数の人からスタートすることになるかもしれないが、芸術性を高めることができる事業もある。これらは収入は上がらないが、これらは公共的利益を追求する高めていく投資であると考えられるため、一つひとつの事業を経済的な価値観で判断しない方がよい。

<資料説明>

○空間創造研究所:専門性、安全性の担保について

○事務局:
・次回開催予定(4月11日)
(閉会)